



3150  
4



3150  
4

昔話 稻妻表紙巻之四

江戸

山東京

傳編

瀟堂

十二 修羅の大鼓

さても銀杏の前ハ山三郎たそひ扶られて生駒山の麓ふもとまでおちのびしが  
 辻堂つじどうあて追手の者もの小捕ことらへられ不破ふへ道みち犬いぬが手て小こつらりて蜘蛛くまじろ手て方の  
 深殿ふかどのおくまりたる一間ひつまのうち小押こおし籠かごられて日のかけだふること  
 わつと月若つきわかしの身みのうへ苦くふあるうへに朝夕あさゆふの食事じきだふりくふ  
 与あへざれば心こころ気き日ひふおとるへ身み体たい夜よも小こやせをそとて命いのちも危あやうく  
 又またえむ人ひとあつのもろもむだうた手て方かたと密談ひそかだんして大殿だいぜん判官はんくわんの  
 命いのちとりつらつとつらつ人の前まへを引ひきついで兩人ふたりあつて昼夜ひるよたえぬ  
 寤現うきげんまゝあつて月若つきわかしのゆへ白杖しろぼうせと責せま小こけしむむんやあつふの



つらなる可責あり。なほひまれざる責苦あり。かゝる折しも。そり次の者  
 をせしあり。黒星眼平只今敵国つらつりおん次ふひく。おんやと  
 まらぬときとあれは。及大歩団。それいそだらぬへど。とりやまを。しそ  
 外とて退る。あどあく眼平まう。いので。椽側小頭とまげ。ていひ。え  
 月若どの。中んとたぐひ。おん首おてま。あれよ。あつせ。あつせ。呼こ  
 方と。とたぐひ。ゆめゆめ。ち。註進の者あり。丹波の国。穴太の里。小住。  
 六字。南无右衛門と。中も者。か。ま。ひ。お。く。は。同。い。じ。し。ゆ。ゆ。え。い。ま。ま。ま。ま。  
 む。ひ。ゆ。ゆ。ゆ。彼。者。い。じ。し。て。打。手。の。む。う。ふ。と。知。若。君。と。つ。れ。て。の。れ  
 あり。中へ。あ。れ。ど。あり。ゆ。あ。む。右。衛。門。と。中。も。い。別。人。と。ふ。ど。佐。良。三。八  
 郎。が。と。ふ。ゆ。と。假。首。と。う。け。さ。し。お。の。が。越。度。い。か。じ。ま。ま。と。と。さ  
 小。相。の。づ。知。手。方。ら。れ。と。同。い。そ。の。殘。念。あり。あ。る。う。へ。い。と。の。前。と

せむも無益あり。あれゆえ。小殺と。れ。を。あ。れ。ど。も。畢。三。見。月。若。の  
 あり。う。を。い。え。ん。と。う。う。ふ。今。日。ま。ま。も。ゆ。け。あ。ま。あ。り。大。殿。の。心。ら。り  
 て。助。命。あ。り。と。あ。り。後。日。の。さ。ぬ。た。げ。あり。さ。り。く。あ。れ。を。殺。ま。な。し。  
 月若三八郎がゆへい。ち。な。ま。び。く。た。ぐ。あ。へ。い。及。大。と。も。い。ゆ。ゆ。ゆ  
 せんとの。く。あ。り。及。大。と。も。い。ゆ。ゆ。ゆ。それ。じ。も。左。を。存。し。さ。る。あ。り。片。時  
 も。後。豫。へ。い。ゆ。ゆ。幸。ひ。日。も。く。れ。あ。ん。と。ゆ。ゆ。今。宵。の。ち。あ。り。傳  
 看。打。ゆ。ゆ。い。ゆ。眼。平。あ。ん。ぢ。の。ゆ。ゆ。の。前。の。を。棄。物。の。せ。夜。子。ま。ま。こ  
 き。と。岩。倉。谷。小。か。き。ゆ。ゆ。ひ。と。う。お。ん。首。お。て。来。る。と。命。し。ゆ。ゆ。ゆ  
 眼。平。腹。心。の。あ。り。と。ゆ。ゆ。庭。さ。さ。棄。物。と。か。れ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。現  
 して。打。伏。た。る。い。ゆ。ゆ。の。前。と。惜。る。も。あ。り。と。高。手。小。手。か。じ  
 わ。げ。て。棄。物。の。あ。り。と。あ。り。と。わ。せ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。庭。づ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。岩。倉



いへよの前  
山倉谷に  
あつて首を  
うんととむ  
時、何者  
ともちれど  
太刀をうり  
打ころして  
いてよの前と  
うがひ去る



名古屋巻之四



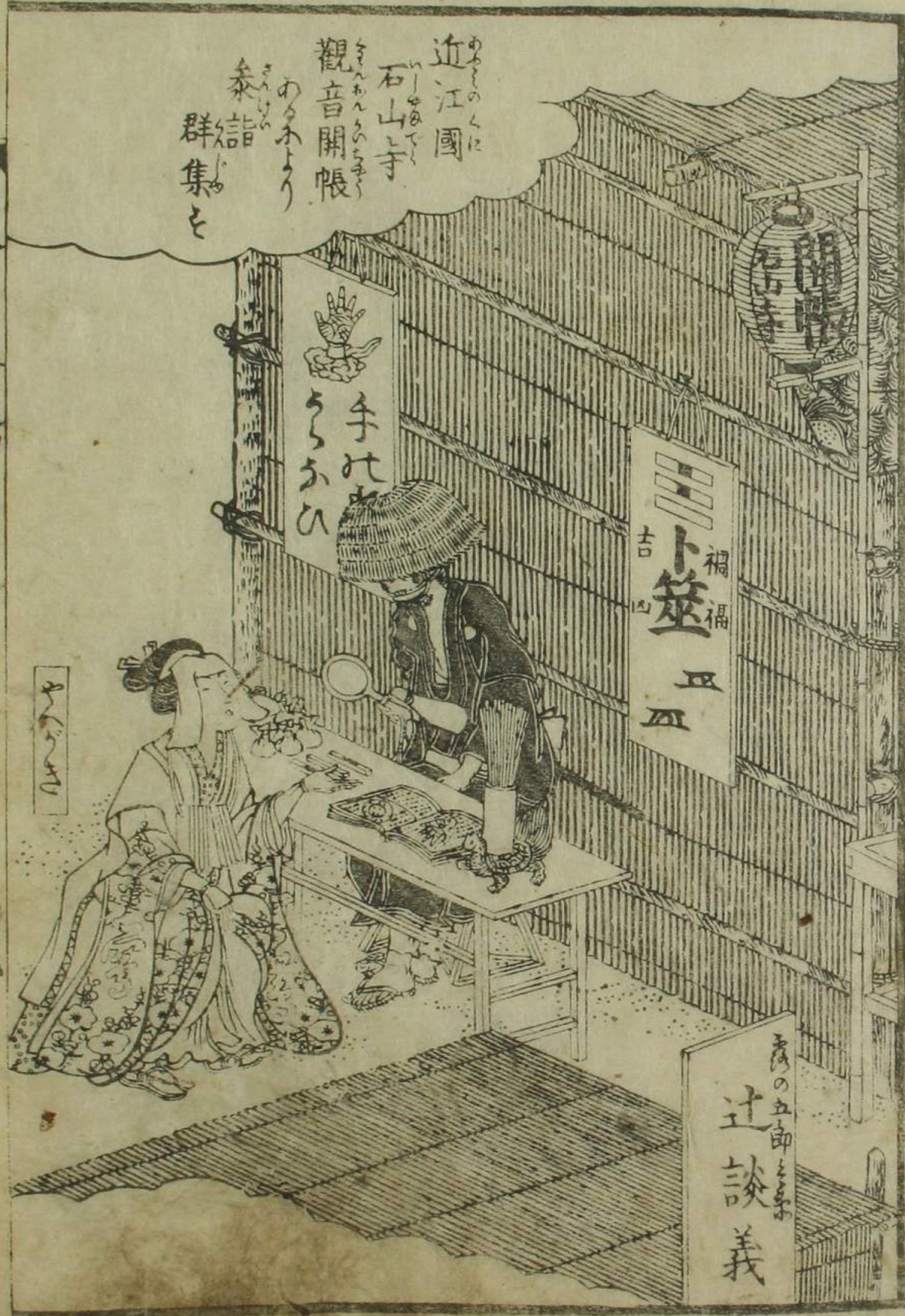
ときひとろりめよの御誓願ハ。あつくや我等も。あまがくたふにり小  
 わらぶや。かろがゆえ小弥陀如来ハ霞あふるといさそあきそあぐり居あふ  
 こころみろく。十万里かろくの西方よと。こころの方小伸あぐりあひて衆生  
 の地獄をほくろと又あひて。あちやくとかほしとあやうく。それより  
 持国多聞あどつ。一騎當千の四天王小命せられ衆生胸裏の地獄と  
 ほくろを御分別のちたくと。声あじうちあけてつひつ。かの楠木をこらて  
 書案を搦地打るじければ芝居一度小鳴動し且笑且感る声よ  
 うくハあざりたり。そのとあうもあはれとちある小屋ほりて。外の方小  
 うろくした少女の才うちみ蛇のまといはきたるさぬと繪をかき。招  
 牌をかかげつ。なるわて。かろがら男戸口小立扇をひいて往來の  
 人をさしよれさつ。声なるやみぶひつ。こればまおとと又あふ。とも

比女子こそ丹波の国ある奥山小住痛師の子され殺生の罪科親の  
 因果の子小ひひふそ。蛇小ふそむとあうちよまらりてちあれさる。ど  
 容ハせ小とぐれてうらじう生とほさる。人かほさ交りあうぬがとあう  
 あたり。十ッ罪障消滅の便ともあるとして。あぬく人々小あせを。こ  
 都小あさてハ四條の川原浪華津よハ道頓堀伊勢の国小あてあてハ白子  
 ちる観音堂のふとりあて又せまらぬ。女のむのあそほさるあつぞあう。前  
 代未同又たぐひあじ。いつとふよき話柄を招牌小つあうりもつ。あつあつ  
 ちとゆぬト又あひてのちあじあへと声あつ。むらりのあね。見物の諸人  
 蟻のごとく小集。蜂のごとく小群りて。あつやのうちあひり。ちあお。あちあ  
 ひーりたあひてこれとあう。比とあう。あちあちられ。六字南无  
 右傍門が娘根る。憐むべし根。ちあう。あもあつ。眉とあつ。辰月と



くら。頭うらみ花はな并ならをさうさう。望のぞじ。色いろ元もと結むすをむきむきび。髪かみのゆひぎなも今いま  
 様さま小こららととああげげてて阿あ曾そ比ひめめににたたるる容よう小こほほくくとと床とこ机ぎめめききるるああのの  
 うう人ひとみ。紅くわいのの毛け鬘まゆげももささてて尻しりううけけたたるる次つぎ女に嬋せん娟けんたたるる牡ぶ丹たん花はなのの咲さきき  
 たるたるるごごくくままててああたたりりももかかややむむるるここううににけけれれとと腹はら手て首くび咽のどららび  
 ちちととみみ蛇へびぞぞももいいくくららととままううままううととひひほほれれかかぬぬくくびびををぢぢたたてて赤あかささ針はりの  
 ややららるる舌したをを吐はいいぐぐ。目めをを石いしちちくくととししててううぐぐりりくくささぬぬ。又またちちままささふふのの毛けをを  
 だだつつととりりままりり見けん物ぶつのの諸しよ人にん何なにのの遠とほ慮りよももああくくつつれれがが教けををちちぢぢととううち  
 ままううりりとと丑うし母ぼままううれれああるる娘むすめちちままややくく妖まじな蛇へび小こ又またささるるれれおおししささまま又また小  
 ああぐぐととややかかくくああささほほききおおととだだ小こちちりりみみたたるるとと。れれががほほうう人ひと集あつてて又またささるる  
 ととししとと。ああのの女にいいふふわわびびととままううららんん。ああふふ不ふ便べんののここととややとといいふふ傍そばのの人ひとの  
 いいくくららいいああくくつつれれがが親おやめめいいととささららてて非ひ義ぎ非ひ道どうををかかここああひひつつ。悪あく人にん

ちちままううれれ。それそれ由ゆ急いそ小こ親おやのの因いん果がの子こみみゆゆららてて。つつくくああささほほききささままううららんん  
 けけれれ。志こころざしいいままをを由ゆぎぎととほほめめ。丑うしのの人ひとののままささ戒かいめめをを。ああうう人ひとぐぐ小こ面おもてささははりり  
 いいつつりりててああままがが罪つみ科かののままええううととるるままううららんんががああるる。憐あわれむむとといいふふああららむむ人ひと  
 ぐぐくくととままううららんんををややりりぬぬああららむむ。つつくくああままががああららむむ。人ひとぐぐ小こ教けままううららんんがが  
 苦くるささ。いいつつととりりああららんんををううららんんとといいふふ。抑おさ石いし山さん寺じハハ石いし光こう山さんとと号ごう。天てん平へい  
 勝しょう宝ほう六りく年ねんのの草そう創そうありあり。聖せい武ぶ天てん皇わうのの朝あさ僧そう正せい良りやう辨べん如にょ意い輪りん觀くわん自じ  
 在ざい丈じやう六りくのの尊そん像ざうをを安あん置ちまま。一いつ十じゆ有ゆう餘よ年ねんをを経へたたるる。灵れい場じやうああららむむ。後ご  
 連れん峯ほう峩いここううとと。岩いわ間ま笠かさ取と醍たい醐ご子こははららあありり。前まへハハ勢せい田でん川がわののああらられれ  
 水みづ秘ひここううとと。湖うみ水みづ小こほほくく。げげ小こ此こ地ちのの月つきをを賞あやししてて。近あづか江か八はち景けいのの一いつ勝しょうとと  
 せせるるももううぐぐありあり。初はつはは法ほふ寺じのの門かど前まへふふびびららのの浪なみ人ひと。深ふか編へん笠かさ小こ面おもてををかかりりしし。



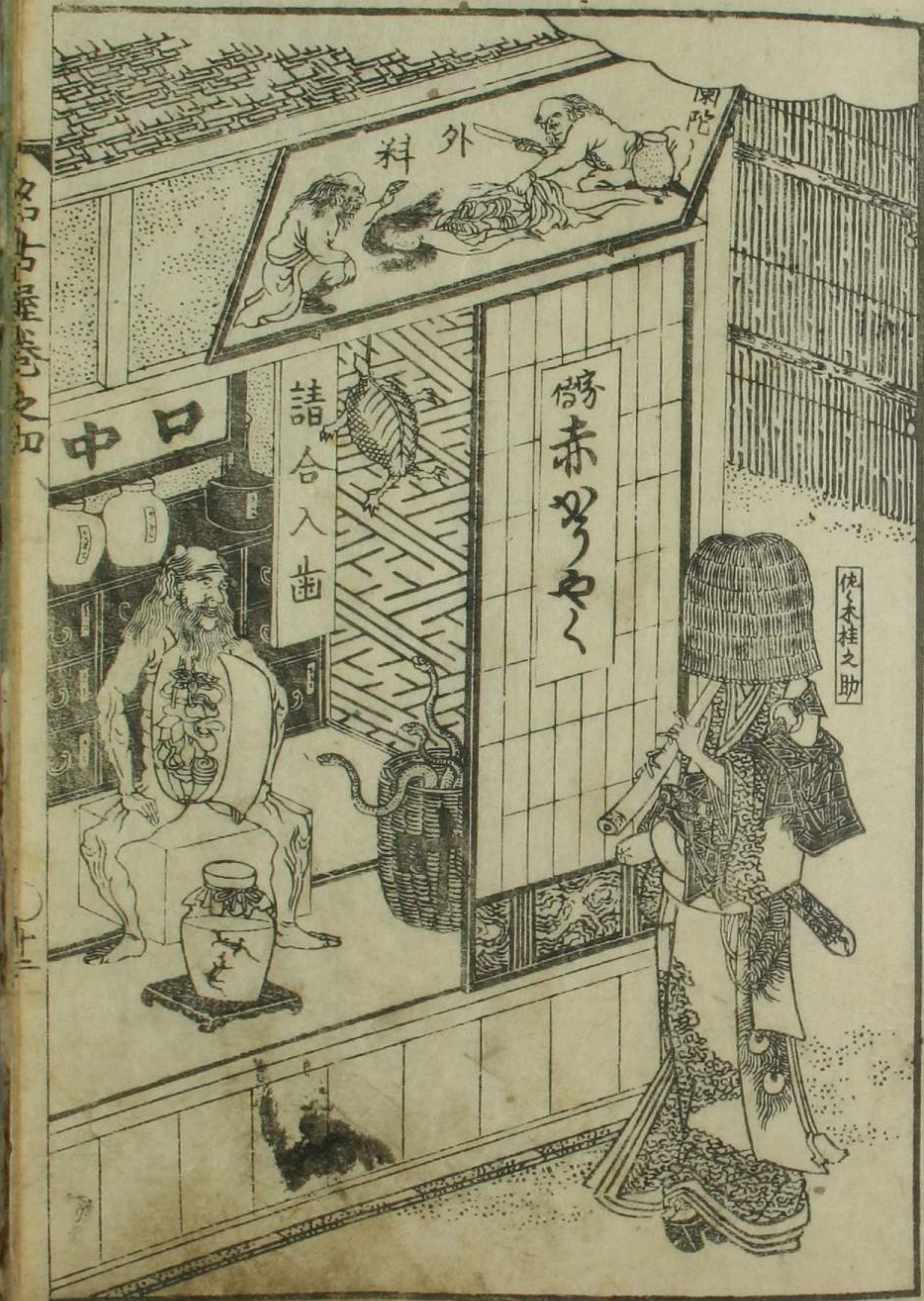
舞のりも 文明の 職人 尽す たり

小鼓を打つ。月あはれは、小倉山その名の如く、れざりけり。とこそ舞く  
 のらひと、たひ物を乞さぬなり。往來あむ人のうち、年の  
 ろりあひ十六七とおぼしく、容兒とて、美しき娘、田舎深といひ、れど  
 紅のこまめ、梅の小枝、小春霞立田の山の道、鳥の文字と、標あそ  
 うしたる。木綿の振袖着て、いととめつけ、禪衣かけ、手覆、膝巾草  
 鞋を穿、菅の小笠とたぐまへて、巡礼の道者と見えたる女、浪人の  
 傍みちらづき、初もまわし、た鼓の音ぞと、ひひつゝ、あぐりたる、  
 つの浪人、編笠おび、おは女とほろり、とて、さてもうらやましき、おこし  
 めき時、出雲の国大社の社家、お養子にほろりたる、八重垣あひ、  
 ちやと、つもの女、られを同お、おらさなる、さる、あて、あぐり、答も、せど、只  
 ちまのりて居る。浪人、うらやまびひ、ひひ、けり、かく、雲、落して、むり、ふかひる

次女あねが、いづるも、理り、とて、声とひ、そら、それ、じ、お、と、兄、長谷部  
 雲、六、あ、ら、と、つ、あ、ぞ、女、ハ、益、お、ら、さ、なる、体、る、り、けり、か、そ、雲、六、女、と、め  
 落、ふ、い、ま、ひ、ま、む、そ、ら、ひ、けり、お、母、と、忍、ぶ、る、ね、人、目、お、れ、野、あ、ら  
 面、を、あ、ぐ、り、か、じ、お、こ、し、何、ゆ、え、か、ら、次、女、と、なり、具、せ、る、人、も、あ、く、若、さ  
 女、の、あ、そ、た、び、り、は、思、お、れ、来、り、ぞ、と、それ、を、女、を、お、兄、を、お、い  
 け、り、の、と、と、て、涙、は、し、ぐ、ま、ま、わ、ど、か、ら、の、算、お、た、ふ、ら、あ、あ、そ、め、ひ  
 し、お、け、り、な、ぐ、め、る、人、ハ、お、れ、め、と、い、ひ、けり、ま、ま、と、お、え、通、一、の、う、ら、な、ひ、り  
 と、そ、妻、が、薄、命、と、同、て、な、べ、養、家、の、父、母、は、春、ワ、づ、一、月、の、同、お、つ、と、こ  
 て、お、ま、り、あ、ひ、妻、ひ、と、と、あ、お、の、と、し、け、養、父、の、弟、あ、そ、妻、が、な、あ、あ、い  
 伯、父、あ、る、人、養、父、の、遺、財、を、奪、え、ん、た、く、と、あ、て、情、ろ、く、も、妻、と、お、ひ  
 せ、り、あ、ね、が、せん、と、ぶ、な、く、は、く、お、兄、を、お、い、ひ、て、お、の、う、へ、を、た、の、り、と

いり外かりりしと又ひ。か、巡おん礼れい小こ女にょと拾ちりしと物ものもつ。幸から匡まて大ま和しの  
 国くに小こいりるもけるが。おん身み在京にやうの節ふしが、らうて俄あ浪らうの才さいとらりまひ。  
 ちゝまふねごとさうつり由よし。やんとかちがり。猛おこてや死しん。洲しゅう川せん小こ才さい  
 ちがめやとどつた。とまぬ。やう。さぬ。ふあひめむいしはぐ。さうて諸しよ国こくの  
 冥みやう場じやうをめぐりて。養やう父ふ母ぼの菩ぼ提だいの為ため我わが身み来き世せをたよりう。とどか  
 ちもせをたよひつる。社しゃ家け小こ育いくて仏ぶつ小こほ。う。心こころたごる。ちう。あひ  
 だね。神かみ仏ぶつもと同どう体たいもきけ。らう。ひと心こころを決けつ。とちちを  
 巡めぐ拜はいして。けう。もは。法ほふ寺じ小こまう。じ。あひひ。ひ。と兄あにらふ。あひ  
 多おほし。金かねく菩ぼ薩ざつのちびさむ。小こ疑ぎり。おん身み。又また何なに由よし。  
 俄あ浪らう人にん。あひ。ひ。う。雲うん六ろくたへて。我わが身みのう。人ひとの物もの諸しよ一いつ席せき小こ尽じんさ。れ。と。珠しゆ更せう六ろく路ろの

傍かたわらといひ人ひと立たお。不ふき。所ところ。あ。わ。い。れ。支し。以い。語ご。し。且また我わが住す家けへ。も。ち。う。へ。じ。  
 と。い。さ。ぶ。く。鼓こ。た。れ。め。の。あ。ど。と。さ。お。ま。め。女にょ。以い。は。け。れ。て。家いへ。小こ。の。り。ぬ。雲うん。六ろく。が。  
 心こころ。底ぞこ。善ぜん。う。悪あく。さ。う。を。知し。ら。う。と。ど。か。う。て。日ひ。も。西せい。山ざん。小こ。の。う。さ。け。い。ぶ。茶ちや。諸しよ。人にん。足あし。  
 そ。や。め。て。お。の。が。さ。う。ぐ。飯いひ。路ろ。と。い。え。俄あ。小こ。寂じやく。寞ま。た。る。折せう。も。一いつ。人ひと。の。虚こ。无む。僧そう。尺せき。八ぱち。の。  
 笛ふえ。と。と。と。滝たき。か。ら。吹ふ。さ。う。て。は。処しよ。あ。あ。ま。う。の。後あひ。お。は。た。て。腹はら。卷まき。小こ。群ぐん。手て。  
 手て。臑のう。揃ぞろ。つ。け。た。る。捕とら。手て。の。人ひと。数かず。を。足あし。し。つ。思しん。ひ。を。時とき。分ぶん。は。さ。ら。ひ。けん。前ぜん。後ご。  
 左ひだり。右みぎ。と。さ。り。か。ら。一いつ。言ご。の。詞ことば。も。ち。う。手て。く。小こ。ト。手て。打うち。ふ。り。て。ゆ。め。さんと。かり  
 け。ら。虚こ。无む。僧そう。尺せき。八ぱち。と。ひ。て。あ。ら。ひ。ま。う。あ。合あ。け。り。所ところ。あ。ひ。う。け。ら。北きた。月つき。後あひ。の。方かた。の。  
 かり。家いへ。の。う。ち。う。り。耳みみ。も。さ。の。さ。う。鬢びん。の。数かず。の。に。頭かぶ。ち。を。と。あ。く。判せん。と。て。す。  
 いと。お。し。げ。ち。る。男おとこ。一いつ。根ね。の。棒ぼう。と。さ。り。て。と。ど。り。出で。捕とら。手て。の。人ひと。数かず。と。あ。り。て。打うち。ふ。  
 打ち。ふ。一いつ。は。ら。み。を。彼か。革くわ。鼓こ。さ。ら。夏あ。あ。さ。り。と。散さん。ぐ。み。ち。り。て。外あ。ち。り。ぬ。



名古屋巻之四

十一



名古屋巻之四

十一



時ふつ男棒をわがまことまげこそ平伏し土小頼をさりほはて恭  
 いひけへ某察しまふ君の佐木若殿挂之助国知公小うごひは  
 実とあらしむりれしと相のぶ虚无僧頭を打ち。このひうけさ  
 こと同のう某の一所不住の修行者あて。ゆより卑賤の者あり  
 かなげども人たぐいあふまといふの者あていも。在とあふおん  
 あれば容易ふ実とあじむらぬも埋り。先ちれが身のうち前ふ  
 つげ。まきまをまふん。そもちうぐれおん家士名護屋山三郎が僕麻呂  
 こやと者の年猿二郎とよそ者あてゆめい兄とめふ山三郎小はく  
 ちづじ。ちうれいお急ありてはつ瓜辞し。古郷河内の国ふりてふ  
 うちあま三郎左衛門の不破伴左衛門が為小園打ふひ山三郎へ平  
 郡の館の騷動ふはれて。ちうれが住家おちまふ。ちうれ君のおん

ことなぐねて安否とこひをり。二つあ伴左衛門をたぐり出して父の仇を  
 むくんと我く小命とて所の方をたぐり。このころ山三郎麻呂と  
 て西国小旅まづりぬ。ちうれ露の五郎を名を更迭談義ふことせそ  
 京大坂へちふおぶと。所人立ちおれ処にちうりて。専尋ねぬ。ちう  
 唯今君おめぐりあひを。我く主従が一念さきし所之とあふおん時ち  
 某考がごとく。賤をいひおん姿と拜し。まふことなもあふまふ。面  
 謁ほぬつ。勿体あるまといひて。実心面おられぬ。虚无僧ちうか  
 げに。誠心と同く。何をさけむ。むに。汝が推量小たが。我へ挂之助  
 汝が面へえまふ。山三郎があふ。麻呂猿次郎とそ兩人あり。ち  
 ちうり同む。むに。このころひゆわ。猿二郎へ買加ち。おん詞。あし  
 ちうれまふ。おん。不破ち。悪意奥方若君の。ちうれ。

ちとさういふさめぐやあぶれまのねども途中おそへさこえじ。おの捕手の  
 おりぐりやんぞおんぞ奴原人数とましとあまびいらふさうんハ必定るねばそくおんを  
 かくしあまびい。しおの奴原素をいりや。あまびいをひびきそ手まつて  
 さうめきぬ。さそさううひの方お家あり。あうり障子母子相傳名方赤  
 膏葉と筆ぞおめたつけなると門口おたて。外のかふあまの葉名を  
 あうなる招牌とわらるるべ。あうくの奇病のさる解體の置るどとあう。  
 こねうともおけいけうなる。外療の葉とひさく家ありけり。横二郎指にて  
 叩くやうがれが旅宿おそい。幸あじハ京よりて家おとぞ。只龍尊の老僕  
 あうの。たれをわゆる者もいづとぞ。桂之助といざあひておの家おとぞ。  
 裏お入りてあると障子とめとのごう引たて。声をとるさうして居らうと  
 けり。は時已お日ハくれ果て。夕月夜の光ののたうらりける。果して

捕手の者ども人数とまし。まうては家ととりかき声たうあうらりいひ  
 けい。ささやどは家おかされたる。虚无僧ハ佐木桂之助国知おうとひは。  
 いふ国知さんち官領職演名殿の内意おう。勘当うけたるまを遣恨  
 おるひ。おそふ野依浪人どもをわらひ。演名お敵さんとさう。は註進の  
 者ありてさうしあされ。あうとりてまうとと教令とやうりて我輩  
 をせむひつるあり。のねね所ぞ。さうお出まうていぬ。あうらけ。あう  
 手むらひで。奴も。さんちお一味の者さん。おの奴もさうくさういふで。  
 首おいぬ。あうておひまうせん。おと口お猛くのあれも。横二郎おされ  
 やうの手あう。あおねて内おさ。いんさう者ハ独もあう。只さうがうさ  
 の。あうりけり。時おあると障子母子影うり。桂之助の声とて。いみさんち  
 らあう。まうて我らう。と因我耻とあひびて。今日まていさあう。二所不住

みまぬよひつるが。さても武運ぶげん尽つたるが。あつたは所このところにおもていらひといふ。  
腹はらからやうりて相果あひちがうぞし。いざ首かぶとさうて高名たかふせ。者ものどもとよがり  
けるが。だて障子まじのさきさぬふも。鮮血せんけつをさしてさぐれいせぬ捕手とらの者ものわれ  
まふ首かぶとさうて賞銀しょうぎんふあぐめんと。遅速ちそくとあそい障子まじをおたふして  
内うちとえぬば。さいつ小桂こくわい之助のすけあひあぐりて正面まへの胡床こしどあう人ひとの長ひとをど  
おはくさ五勝六腑ごしょうりくふといろざりたる。神農かみの胴人形どうにがた。右みぎ小茶匙こぢやくしを持もたり小茶こぢ  
草くさとさうたる。ととまおまぬ障子まじのひぬふり血ちつとええ。い赤膏菜あかかうさいみ  
どありける。あつ者ものどもとれとんとて只ただあそい酒さけお醉まなるとしける。さとい  
欺あざむめれたる口くちゆさ。さうあつても今いまの声こゑ桂之助くわいのすけおまざれば。かといわれ  
たふふとさぐひる。とて奥おくの一間いっけんと目めめて走りはしいんとひめれ誤あやまりて傍そばに  
ありける。芭籬さだかとさうたふ。けがたちまち数多あまたの蛇へびのさう出て。めれげ

手脚てあしおまはひつさけらあぞお驚おどろてさうさたち。又また誤あやまりて膏菜かうさい編あと  
ふみつア一いちけれ。膏菜かうさい足あしのうふねづりつとてえさぬ。蛇へびの手てを  
膏菜かうさいの足あしめせ。それとのぞめん。ととま。めれおまらわれ。わざい。進すす  
退たいを失しひて。只ただ騷動そうどうさうのさうりけり。時とき分ぶんはと猿さる二郎にらうなをたひさゆひ。  
めとそめがてオカふ打扮うたは明見めいけん。たる大太刀おほたちと抜ぬりちて。一間いっけんのうち  
さうとさぐり出でめ。斬ざふさうりたる。且かつびみる。大おほ小狼せうろう狼ろう狽さい。一人ひとりと  
して敵たかまる者ものあつ。さうけり。めの大太刀おほたちのり居合いあひの刃引やいばひき太刀たちちり。は  
さうとつけれぬ。痕あと。蚯蚓つゐらひのごとく。それあがるのさ。一命いちめいお悪あつ。はは  
さい。ま。ま。ま。魂たまを奪うばれて。さうま。ま。臆おそ。たる者ものどもさぬ。は  
齧かふ粘ねたる蠅へんのごとく。たわれ。さう起たれ。手てとさう足あしを  
さうとさうさ。ゆ。ゆ。ゆ。お。お。お。起たりける。疵持あざもち





て近江の国おひのくにふらつりおひのくに大津走井おひのくにのむらり小住繪おひのくにをわけて往來の旅人  
 小住とひさきおひのくに。妹が菩提おひのくにのむらもとろふらうらうらおひのくに。多分おひのくに佛像おひのくにと画  
 きの十三おひのくに仏おひのくに地おひのくに藏おひのくに菩薩おひのくにのたぐひあり。そのころハ民百姓おひのくにの家おひのくに小住おひのくには  
 みて。おひのくに又平おひのくにがおひのくに仏おひのくに繪おひのくにとむらめて持おひのくに仏おひのくにの本おひのくに尊おひのくにありけり。や。仏おひのくに繪おひのくにの  
 小住おひのくには。浮世おひのくにの人物おひのくにさるぐのざれ繪おひのくにとむらさける由おひのくに。浮世おひのくに又平おひのくに大津おひのくに又  
 平おひのくにもいつり。ゆれ又生おひのくにつとて吃おひのくに寒おひのくに言おひのくにありけり。吃おひのくに寒おひのくにの又平おひのくにもいつり。  
 その繪おひのくにと大津おひのくに繪おひのくにも追分おひのくに繪おひのくにといひて時おひのくにの人おひのくに童おひのくにるぐのめづるや。や  
 かに。又平おひのくにが妻おひのくにの名おひのくにと小枝おひのくにといひ。藤波おひのくにが次おひのくにの妹おひのくに阿おひのくに竜おひのくにも。今おひのくにハ兄  
 又平おひのくに小住おひのくに良おひのくにとろふありて。ひとろふ住おひのくにぬ藤波おひのくにハ前おひのくにつ年おひのくに佐おひのくに良おひのくに三おひのくに八おひのくに郎おひのくにが  
 小住おひのくに罪おひのくにちして殺おひのくにされたむら。又平おひのくに何おひのくにとむ三おひのくに八おひのくに郎おひのくにと一おひのくに太おひのくに刀おひのくに恨おひのくにて妹おひのくに修おひのくに羅おひのくに  
 の宿おひのくに恨おひのくにをむらじほるさんと日おひのくに来おひのくにらうらむらるといひども。三おひのくに八おひのくに郎おひのくに出おひのくに奔おひのくにのち

非おひのくに小おひのくに住おひのくに人おひのくにあむらむらむら。むらむら月おひのくに日おひのくにとむらむら。初おひのくにめ年おひのくにの春おひのくに菟おひのくに浪おひのくにが  
 祥おひのくに月おひのくに命おひのくに日おひのくにあむらむら日おひのくに妻おひのくに小枝おひのくに妹おひのくに阿おひのくに竜おひのくに号おひのくにがむらむら。縣おひのくに神おひのくに子おひのくにと  
 やむら。菟おひのくに浪おひのくにが口おひのくにとむらむら。冥途おひのくにのおとづとむらむら。さて降おひのくに巫おひのくに上おひのくに坐おひのくに小住おひのくに居おひのくにむら  
 て目おひのくにらうらの人おひのくにあむら目下おひのくにも。生おひのくに口おひのくにとむらむら。小枝おひのくにとむらむら。目下おひのくにの  
 者おひのくにあむら死おひのくに口おひのくにありとむらむら。櫛おひのくにの葉おひのくにあむら水おひのくにむらむら。巫おひのくにハうらうらむらむらと  
 るとむら。弦おひのくにを打おひのくにあむら。且おひのくに神保おひのくにとむらむら。むらむら。  
 丈おひのくにほむら敬おひのくにてむらむら。上おひのくにハ梵おひのくに天おひのくに帝おひのくに釈おひのくに大おひのくに天おひのくに王おひのくに下おひのくにハ阿おひのくに魔おひのくに法おひのくに王おひのくに。  
 五おひのくに道おひのくに冥おひのくに官おひのくに天おひのくにの神おひのくに地おひのくにの神おひのくに家おひのくにの内おひのくにあむら井おひのくにの神おひのくに。電おひのくにの神おひのくに伊おひのくに勢おひのくにの國おひのくに  
 小住おひのくに。天照おひのくに皇おひのくに大おひのくに神おひのくに宮おひのくに外おひのくに宮おひのくにあむら四十おひのくに未おひのくに社おひのくに内おひのくに宮おひのくにあむら八十おひのくに未おひのくに社おひのくに。兩おひのくにの宮おひのくに  
 風おひのくにの宮おひのくに月おひのくに讀おひのくに日おひのくに讀おひのくにの御おひのくに神おひのくに当おひのくに國おひのくにの靈おひのくに社おひのくにあむら坂おひのくに本おひのくに山おひのくに王おひのくに大おひのくに權おひのくに現おひのくに膽おひのくに吹おひのくに  
 神おひのくに社おひのくに多おひのくに賀おひのくに明おひのくに神おひのくに竹おひのくに生おひのくに島おひのくに辨おひのくに才おひのくに天おひのくに築おひのくに摩おひのくに明おひのくに神おひのくに田おひのくに村おひのくにの社おひのくに日本おひのくに六十

答古屋卷之四

十一

餘州<sup>いさちう</sup>とてつるの神の政所<sup>まんどまのつかもと</sup>出雲の国の大社<sup>おほやしろ</sup>神の数<sup>かぶ</sup>九万八千七社の  
 御神<sup>みかみ</sup>仙の数<sup>せんのかず</sup>一万三千四箇<sup>かず</sup>の霊場<sup>れいじやう</sup>眞道<sup>まこと</sup>をおぼし此<sup>こ</sup>降<sup>くだり</sup>也<sup>なり</sup>。  
 か<sup>か</sup>れ<sup>れ</sup>あり<sup>あり</sup>。は<sup>は</sup>時<sup>とき</sup>ふ<sup>ふ</sup>ら<sup>ら</sup>が<sup>が</sup>の<sup>の</sup>と<sup>と</sup>は<sup>は</sup>残<sup>のこ</sup>り<sup>り</sup>あり<sup>あり</sup>。と<sup>と</sup>て<sup>て</sup>な<sup>な</sup>が<sup>が</sup>梓<sup>あざ</sup>の<sup>の</sup>神<sup>かみ</sup>。  
 り<sup>り</sup>や<sup>や</sup>那<sup>な</sup>の<sup>の</sup>諸<sup>しよ</sup>精<sup>しやう</sup>灵<sup>りやう</sup>弓<sup>ゆみ</sup>と<sup>と</sup>前<sup>まへ</sup>の<sup>の</sup>ほ<sup>ほ</sup>ひ<sup>ひ</sup>の<sup>の</sup>親<sup>おやぢ</sup>。一<sup>いっ</sup>郎<sup>にやう</sup>ぶ<sup>ぶ</sup>の<sup>の</sup>より<sup>より</sup>三<sup>さん</sup>郎<sup>にやう</sup>ぶ<sup>ぶ</sup>の<sup>の</sup>人<sup>ひと</sup>も  
 かり<sup>かり</sup>と<sup>と</sup>水<sup>みづ</sup>も<sup>も</sup>かり<sup>かり</sup>れ<sup>れ</sup>。かり<sup>かり</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>もの<sup>の</sup>五<sup>ご</sup>尺<sup>じやく</sup>の<sup>の</sup>弓<sup>ゆみ</sup>。一<sup>いっ</sup>歩<sup>ぽ</sup>う<sup>う</sup>と<sup>と</sup>て<sup>て</sup>な<sup>な</sup>が<sup>が</sup>寺<sup>てら</sup>の<sup>の</sup>仏<sup>ぶつ</sup>壇<sup>だん</sup>み  
 ひ<sup>ひ</sup>び<sup>び</sup>く<sup>く</sup>り<sup>り</sup>。  
 梓<sup>あざ</sup>の<sup>の</sup>弓<sup>ゆみ</sup>も<sup>も</sup>ひ<sup>ひ</sup>の<sup>の</sup>れ<sup>れ</sup>く<sup>く</sup>て<sup>て</sup>。波<sup>なみ</sup>浪<sup>なみ</sup>が<sup>が</sup>ある<sup>ある</sup>は<sup>は</sup>な<sup>な</sup>ら<sup>ら</sup>ず<sup>ず</sup>を<sup>を</sup>ま<sup>ま</sup>す<sup>す</sup>て<sup>て</sup>ま<sup>ま</sup>つ<sup>つ</sup>る<sup>る</sup>。ま<sup>ま</sup>じ  
 々<sup>々</sup>水<sup>みづ</sup>も<sup>も</sup>向<sup>むか</sup>ひ<sup>ひ</sup>て<sup>て</sup>あり<sup>あり</sup>。主<sup>ま</sup>君<sup>きみ</sup>と<sup>と</sup>し<sup>し</sup>り<sup>り</sup>も<sup>も</sup>公<sup>こう</sup>吏<sup>し</sup>枕<sup>まくら</sup>が<sup>が</sup>ひ<sup>ひ</sup>とも  
 る<sup>る</sup>ひ<sup>ひ</sup>。烏<sup>くわ</sup>帽子<sup>ぼうし</sup>子<sup>こ</sup>宝<sup>たから</sup>と<sup>と</sup>産<sup>う</sup>ま<sup>ま</sup>ふ<sup>ふ</sup>。唐<sup>から</sup>の<sup>の</sup>鏡<sup>かみ</sup>と<sup>と</sup>かり<sup>かり</sup>が<sup>が</sup>と<sup>と</sup>。み<sup>み</sup>ん<sup>ん</sup>才<sup>さい</sup>号<sup>ごう</sup>あ<sup>あ</sup>も  
 安<sup>やす</sup>堵<sup>と</sup>させ<sup>せ</sup>。な<sup>な</sup>の<sup>の</sup>れ<sup>れ</sup>く<sup>く</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>さ<sup>さ</sup>せ<sup>せ</sup>。ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>。み<sup>み</sup>ひ<sup>ひ</sup>。る<sup>る</sup>も<sup>も</sup>左<sup>ひだり</sup>り<sup>り</sup>繩<sup>なは</sup>田<sup>でん</sup>ひ<sup>ひ</sup>が<sup>が</sup>ひ<sup>ひ</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>  
 毒<sup>どく</sup>が<sup>が</sup>の<sup>の</sup>う<sup>う</sup>へ<sup>へ</sup>露<sup>つゆ</sup>を<sup>を</sup>り<sup>り</sup>も<sup>も</sup>罪<sup>つみ</sup>あり<sup>あり</sup>て<sup>て</sup>。邪<sup>よこしま</sup>見<sup>み</sup>の<sup>の</sup>み<sup>み</sup>ん<sup>ん</sup>才<sup>さい</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>く<sup>く</sup>し<sup>し</sup>。つ<sup>つ</sup>ら<sup>ら</sup>な<sup>な</sup>恨<sup>にくしみ</sup>

の<sup>の</sup>悪<sup>あく</sup>念<sup>ねん</sup>が<sup>が</sup>は<sup>は</sup>才<sup>さい</sup>を<sup>を</sup>焦<sup>こ</sup>と<sup>と</sup>火<sup>か</sup>と<sup>と</sup>あり<sup>あり</sup>。も<sup>も</sup>じ<sup>じ</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>る<sup>る</sup>ひ<sup>ひ</sup>の<sup>の</sup>眞<sup>まこと</sup>道<sup>みち</sup>也<sup>なり</sup>。今<sup>いま</sup>も<sup>も</sup>未<sup>ま</sup>だ<sup>だ</sup>して<sup>して</sup>居<sup>ゐ</sup>る<sup>る</sup>也<sup>なり</sup>。  
 哀<sup>あは</sup>れ<sup>れ</sup>ひ<sup>ひ</sup>ひ<sup>ひ</sup>け<sup>け</sup>れ<sup>れ</sup>。小<sup>せう</sup>枝<sup>し</sup>泣<sup>なみ</sup>声<sup>こゑ</sup>あり<sup>あり</sup>て<sup>て</sup>。う<sup>う</sup>ら<sup>ら</sup>な<sup>な</sup>も<sup>も</sup>こ<sup>こ</sup>ろ<sup>ろ</sup>も<sup>も</sup>。眞<sup>まこと</sup>途<sup>みち</sup>の<sup>の</sup>苦<sup>くるしみ</sup>患<sup>あはれ</sup>と<sup>と</sup>巨<sup>こゝろ</sup>と<sup>と</sup>  
 る<sup>る</sup>ひ<sup>ひ</sup>も<sup>も</sup>さ<sup>さ</sup>ら<sup>ら</sup>な<sup>な</sup>。胸<sup>むね</sup>が<sup>が</sup>さ<sup>さ</sup>ぐ<sup>ぐ</sup>り<sup>り</sup>心<sup>こゝろ</sup>も<sup>も</sup>消<sup>き</sup>る<sup>る</sup>。さ<sup>さ</sup>ら<sup>ら</sup>ひ<sup>ひ</sup>と<sup>と</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>ひ<sup>ひ</sup>て<sup>て</sup>あ<sup>あ</sup>ち<sup>ち</sup>げ<sup>げ</sup>。阿<sup>あ</sup>耷<sup>た</sup>の<sup>の</sup>  
 う<sup>う</sup>ら<sup>ら</sup>な<sup>な</sup>打<sup>うち</sup>伏<sup>ふし</sup>て<sup>て</sup>涙<sup>なみだ</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>な<sup>な</sup>。巫<sup>まじ</sup>の<sup>の</sup>い<sup>い</sup>ひ<sup>ひ</sup>け<sup>け</sup>。地<sup>ち</sup>獄<sup>じやく</sup>の<sup>の</sup>う<sup>う</sup>ち<sup>ち</sup>の<sup>の</sup>お<sup>お</sup>も<sup>も</sup>い<sup>い</sup>  
 さ<sup>さ</sup>と<sup>と</sup>同<sup>どう</sup>て<sup>て</sup>な<sup>な</sup>が<sup>が</sup>妻<sup>つま</sup>が<sup>が</sup>と<sup>と</sup>く<sup>く</sup>。み<sup>み</sup>ん<sup>ん</sup>の<sup>の</sup>死<sup>し</sup>。た<sup>た</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>の<sup>の</sup>山<sup>さん</sup>地<sup>ぢ</sup>獄<sup>じやく</sup>と<sup>と</sup>て<sup>て</sup>。垂<sup>つ</sup>氷<sup>へい</sup>氷<sup>へい</sup>  
 さ<sup>さ</sup>ら<sup>ら</sup>な<sup>な</sup>植<sup>うゑ</sup>た<sup>た</sup>る<sup>る</sup>。さ<sup>さ</sup>ら<sup>ら</sup>な<sup>な</sup>劍<sup>けん</sup>の<sup>の</sup>山<sup>さん</sup>と<sup>と</sup>牛<sup>うし</sup>頭<sup>がしら</sup>馬<sup>ば</sup>頭<sup>がしら</sup>の<sup>の</sup>鬼<sup>おに</sup>も<sup>も</sup>。さ<sup>さ</sup>ら<sup>ら</sup>な<sup>な</sup>が<sup>が</sup>ひ<sup>ひ</sup>の<sup>の</sup>蛇<sup>へび</sup>と<sup>と</sup>  
 あ<sup>あ</sup>げ<sup>げ</sup>て<sup>て</sup>追<sup>お</sup>ひ<sup>ひ</sup>つ<sup>つ</sup>る<sup>る</sup>。罪<sup>つみ</sup>人<sup>ひと</sup>の<sup>の</sup>い<sup>い</sup>せ<sup>せ</sup>な<sup>な</sup>と<sup>と</sup>さ<sup>さ</sup>ら<sup>ら</sup>な<sup>な</sup>。さ<sup>さ</sup>ら<sup>ら</sup>な<sup>な</sup>け<sup>け</sup>び<sup>び</sup>つ<sup>つ</sup>て<sup>て</sup>さ<sup>さ</sup>せ<sup>せ</sup>の<sup>の</sup>お<sup>お</sup>も<sup>も</sup>い<sup>い</sup>。  
 苦<sup>くるしみ</sup>い<sup>い</sup>ひ<sup>ひ</sup>の<sup>の</sup>妻<sup>つま</sup>も<sup>も</sup>日<sup>ひ</sup>々<sup>々</sup>ふ<sup>ふ</sup>の<sup>の</sup>苦<sup>くるしみ</sup>と<sup>と</sup>う<sup>う</sup>ら<sup>ら</sup>な<sup>な</sup>。あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>な<sup>な</sup>火<sup>ひ</sup>の<sup>の</sup>車<sup>くるま</sup>も<sup>も</sup>の<sup>の</sup>さ<sup>さ</sup>ら<sup>ら</sup>な<sup>な</sup>。黒<sup>くろ</sup>闇<sup>あん</sup>  
 道<sup>みち</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ひ<sup>ひ</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>な<sup>な</sup>。あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>な<sup>な</sup>血<sup>ち</sup>の<sup>の</sup>池<sup>いけ</sup>も<sup>も</sup>ひ<sup>ひ</sup>ら<sup>ら</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>火<sup>か</sup>の<sup>の</sup>雨<sup>あめ</sup>も<sup>も</sup>才<sup>さい</sup>を<sup>を</sup>焦<sup>こ</sup>と<sup>と</sup>時<sup>とき</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>な<sup>な</sup>。  
 紅<sup>こう</sup>蓮<sup>れん</sup>大<sup>だい</sup>紅<sup>こう</sup>蓮<sup>れん</sup>の<sup>の</sup>水<sup>みづ</sup>も<sup>も</sup>さ<sup>さ</sup>ら<sup>ら</sup>な<sup>な</sup>。叫<sup>こゝろ</sup>喚<sup>わん</sup>大<sup>だい</sup>叫<sup>こゝろ</sup>喚<sup>わん</sup>の<sup>の</sup>炎<sup>えん</sup>も<sup>も</sup>さ<sup>さ</sup>ら<sup>ら</sup>な<sup>な</sup>。品<sup>しん</sup>の<sup>の</sup>さ<sup>さ</sup>ら<sup>ら</sup>な<sup>な</sup>。  
 地<sup>ち</sup>獄<sup>じやく</sup>の<sup>の</sup>さ<sup>さ</sup>ら<sup>ら</sup>な<sup>な</sup>。詞<sup>ことば</sup>の<sup>の</sup>さ<sup>さ</sup>ら<sup>ら</sup>な<sup>な</sup>。責<sup>せき</sup>の<sup>の</sup>苦<sup>くるしみ</sup>も<sup>も</sup>さ<sup>さ</sup>ら<sup>ら</sup>な<sup>な</sup>。唯<sup>ただ</sup>忘<sup>わす</sup>れ<sup>れ</sup>る<sup>る</sup>も<sup>も</sup>な<sup>な</sup>。  
 地獄のさな。ちうく。詞のさな。責の苦し。ちうく。唯忘るるも。



藤波かびふ  
うかしやうの  
亡塊梓の  
ひふ  
引ふ  
来る

殿のめんまぢうくくひりづらん。めんがらほ夫婦妹をじとひひるば。又平  
 へ目とまらありあめ。さげば同あど不便あり。まぐら我とつづくと。千辛  
 万苦のそのうちふ。なめく少の福と得て。あひあやう殿ふりぞと。その  
 月の出世とあぶ間もあく。不慮の枉死とあう。たげん心の残も理せめて  
 敵をたづぬいづ。仇とむくの修羅の宿恨をさう。さげば。さうく  
 仏果と得て悪趣とまぬぬれ。念珠とありまじ。南无阿弥陀仏とさ  
 仏と。とつる声も吃寒言。いづ。哀とぞまらけり。巫又いひける。そのあを  
 こそ我身少の。讀経ふまらる功德なれ。いづ人のお情や。仇とむくのさび  
 あへ情るは。いづとまを手向たぬりし飯菜も。みづれ鳥ふさなげ。と  
 妾がもよふと。うき。飢ふたづ。餓鬼の飯。炎とるりて消失ぬれ。や  
 いみされ鳥とよけてたづ。うれぐたのりづどじ。あな名残と。誦りたさ

ことひひたさ。こと。数あく。あうそ。尽ぬれ。も。黄泉の使あけぬ。や。いづぬ。や。を  
 ぞと。いひ。おろりて。巫。い。目と。ひ。れ。瘳と。枕て。居たり。けり。又。平。米。錢と。さう。て  
 与へ。との。旁と。謝し。け。と。巫。い。これと。う。け。と。ま。ら。つ。れ。と。告。と。ま。ら。り。い。づ。ら  
 扱小枝。い。今。宵の。仏。子供。びん。と。高。木。へ。餅。買。ふ。ま。出。と。い。阿。竜。ハ。ら。う。と。さ。い  
 ぬ。い。この。ひ。多。ふ。香。と。盛。て。手。向。を。や。と。奥。ふ。つ。と。又。平。独。ら。ふ。の。さ。う。手。を  
 こ。ぬ。れ。て。そ。居。と。う。け。り。頃。し。も。弥。生。の。そ。い。ち。あ。て。堅。田。ふ。お。つ。雁。金。も。  
 う。い。の。飯。る。時。あ。ふ。比。良。の。高。嶺。の。雪。お。ろ。り。餘。寒。を。す。す。と。肌。さ。ゆ。  
 瀬。田。ふ。お。つ。あ。く。日。の。かげ。も。西。方。浄。土。と。ろ。あ。う。幸。崎。の。松。風。も。常。楽。我  
 浄。と。さ。さ。ゆ。り。栗。津。の。嵐。を。世。の。中。の。生。者。必。滅。と。觀。と。う。け。ば。天。早  
 瀬。の。船。も。人。の。身。の。會。者。定。離。と。ぞ。い。は。え。石。山。の。月。三。井。の。鐘。生  
 死。長。夜。の。夢。の。世。と。悟。と。る。人。々。外。の。方。ふ。鉦。の。音。念。仏。の。声。い。づ。も

殊勝ふこもえけり。又平らぬを同ほけて。庭小あり立折しも。軒端小  
 通ふ松の風柴の折戸をひびきけし。外の方とるまふ。友とせむひ  
 錫杖とほらして。回国の修行者と扱ふ。まじやふ。竹垣の津  
 のうちふたふと。又平らうづきそいそ。けしも同胞の亡霊とまら。  
 志のある。修行者のおりせし。そ幸なれ。荒屋のへる。と  
 今宵ハ我家小一宿。終夜回向して。まりぬ。時ふおふ。と  
 志賀大根。蠅大豆。蘇林の奇と供養。見のま。ちふ。と  
 いひけぬ。修行者お同て。その。にけき。時ハハ。と  
 石部の報謝。宿と。と。朝の雲々の露。一所不住の  
 身のうらぬ。いそ。旅もあ。殊小亡人の志と。と  
 び。ま。報謝小あ。と。又平ら。と。

苔井の水小足。せ。ハ。回坐と。ま。けて何。と。と。修行  
 者。憂世を。一。用居の体。と。又平ハ。裏  
 不灰木うち。尾羽打。浪人の住居。お宿。も。し  
 さ。信樂焼の天目小茶の香。手煎。心。の  
 あり。四方山の話。と。立山の地獄。は。熊野詣の  
 の。と。時。と。又  
 平仏壇。み。た。蘇抹の奇。と。調。あ。と。回向  
 さ。といひ。修行者の仏壇。む。ひ。南无  
 出灵頓證。仏果菩提。南无。と。一心。不。偶。仏壇の  
 うち。と。白木の位牌。小。妙劍。信女。長祿二年。戊寅。三月五日  
 と。修行者。と。の法名。の。ち。小。の



うふ心せけが。ものりふとあつらふと唯口指して気とつうを傍より  
 於竜アそて丹とそさたる皿と筆ととりて与つ日。又平らねとさ。机の  
 上ふものつと。あむ右衛門読らせり。もんぢ六年以前長谷部雲六と  
 せんりふ者といひ合せ佐々木の家宝百蟹の絵巻物と奪取。あふの  
 ろぞ。波浪を害して逃去たる大罪人。いそこのごり及あん。それげり則  
 是波浪が兄湯浅又平といふ者あり。汝と打て妹が冥途の病恨とを  
 せん。日來心づけた。いそごも弗ふ。あくれげねば。いほく月日とせらり  
 今月今日妹が祥月余日ふらり。あひら因果のめぐる車の輪妹が登  
 びく所あら。執豫せし比奥あり。觀面の惡報妹の敵のぬぬ所を  
 ちや勝負と決せしを昏かり。あむび刀とさうる。して只一歩とさうつ  
 せび。あむ右衛門あむおとらうべあらぬ。それげらぬの。あむら子細と一

通り。あむらとて。あむらとて。あむらとて。あむらとて。あむらとて。あむらとて。  
 小枝。餅とゆらけて立ち。何夏やんと志が。門ふた。いそごて内の様子  
 とうかひけが。又平がの。あむらとて。あむらとて。あむらとて。あむらとて。あむらとて。  
 の手ふまざりて。あむらとて。あむらとて。あむらとて。あむらとて。あむらとて。  
 大恩とあむらと。日來心ふ忘れざる。恩人の。則は。あむらとて。あむらとて。あむらとて。  
 といふあぞ。又平。あむらとて。あむらとて。あむらとて。あむらとて。あむらとて。  
 居る。あむらとて。あむらとて。あむらとて。あむらとて。あむらとて。  
 ある女あり。小枝。あむらとて。あむらとて。あむらとて。あむらとて。あむらとて。  
 だ。あむらとて。あむらとて。あむらとて。あむらとて。あむらとて。あむらとて。  
 今夜。京北山の杉坂。あむらとて。あむらとて。あむらとて。あむらとて。あむらとて。  
 とさむらとて。あむらとて。あむらとて。あむらとて。あむらとて。あむらとて。

谷古屋卷之四

七三



六字かむを某の  
 修行者不  
 身と檢して  
 大津又平が  
 家に宿を



古今圖書集成

〇七五



手世又平

かむるん

古今圖書集成

〇七五





深く父の汚名とよつがんとて物芝居小舟と賣て金とろのへかの  
 巻物と買とりたる夏月若小妻磯菜とつけて河内の国某の寺小舟の  
 ぐせに地りぬ回国の修行者小舟を拾へて其の巻物となつて掛之  
 助とて二方の中へとなつて出でけやも不思議おらふ小舟を  
 さねなど位牌の法名とて似たる支とるひしまで。さめやうに語りたる  
 小舟又平夫婦お竜もさめりて其実と知たむいさぬ忠臣と轉  
 感嘆おたごりけり。あむ右衛門つぎひていへ。おん舟小出會。恨の  
 ぬふりて死し。冥途小いさして藤波さのふひひけせんこといへ。こ  
 望む所あるれども。主君御夫婦御親子の先途とえさけ。再世小出  
 小舟をまたその死あふに命あつた。あやの間の某が命と某小あつた地  
 なるいとし。おの病願とてせしうの首さうのふておん舟小あつた

常言も大丈夫の一言へ駒馬も走どととり。若は詞小  
 露なるともつらつらあべ立地小天地神明の御罰とつらふと  
 恩の恩仇の仇ある。少の恩をみて覚悟の命とたつた所  
 存ると。詞とつしていひけし。又平返答の詞あり。つと立てた  
 とつととて扱をもち。あむ右衛門がたりさへ編笠とどらと斬て  
 仏壇小手向。いふ友浪汝が敵佐と良三郎が首と。おののごとくち  
 たり。速小恨みとつて仏果と得よ南无阿弥陀仏とて仏ととる。  
 初南无右衛門小ひひの晋の豫讓が例あり。今已小妹が仇成り。い  
 たり。あむ恨みとつて。いふく妻小枝が命を救む。いふ大恩と  
 報むるの事あり。その恩を報むる死仕方あり。つとての紙門と押  
 ひつけ。一回のうち小声あり。某さねとつらふあり。つと委細の事

と同様にをといひつ。立せう人ハ乃是別人ハあり。佐木桂之助国  
 知あり。あむ右衛門様のもうして退け平伏せぬ。桂之助いひる  
 ハ我倭者の為ハこそあらざりて行と乱。汝等が諫言ハめらひを  
 今もハ波浪が非業の死ハ畢竟我手ハなして殺セーも同然あり  
 我眼ありとる。誠の忠臣とあることありて百蟹の巻物を奪  
 も汝が仕業とるひん。大方誤りなり。今汝が女のがらうとまけん。楓  
 が孝行あり。巻物とりて出。文弥々忠義ありて月若も恙  
 あり。なびいすれり者どもが不便なる才の果とるハ悲歎ハせ  
 せりぞり。我不行跡ありて父の勘気とつら。かく漂泊の才  
 とありて今後悔とといひても更ふかひる。いれちて恥とのこ  
 さんらして自殺せらとるひつとら。なびぐすれども道犬が謀計

館の騒動とありふさげ。父うんのめん才のうん気づふ。時節ハ  
 まち。御勘気のちうとらけてちちあり。家とおらんとあふ。おち  
 ちちの志のびて。むらうく月日とあらつる。以家のあじ又平。波浪  
 ちちの零落とと憐れ深くいひつてつぐまひおらぬ。なびや山三  
 郎不破伴左衛門がなめ父とおとたる。夏も。つれが僕猿二郎と  
 けふ者ハあひて。うらうらぬとのひけぬ。あむ右衛門頭とさげ。めん  
 気づういあをばさぬ某命あんかざり。道犬が悪意と乱。し。  
 再世ハのござ。まあうとを。桂之助とを。たのめり。  
 どとひける。折しも空中。一羽の鷹。片田ハ落る。鷹を。て  
 椽さねハ撲地あり。あむ右衛門。膝ハすり。再飛んと羽た。とこ  
 ども。飛とあむらび。うらうらぬ。足ハ財布とあひつけたる。足

こちろそ飛とぶこちろそとぶるなり。あむ右衛門ごんえんのこびらつ。財布ざいふとこびて  
 又またねば。うちふおしせりやうを百兩ひゃくらうをりの小判せうばん金かねあり。切きはは金のかねのかりりふ  
 たんたんどしどしととおちたおちたる。朱しゆ宿しゆくがが鷹たかハ臆おそみま金錢きんせんとと貫つぬぬ兒こ藤武ふじぶ、鷹たかハ  
 脚あしふふ帛書ひやくしよとと繫つ系けいたる。たぬたぬハハあれあれれどど。かかるる大金たきんとと鷹たかの足あしふふひひつつけ  
 たりたりハ何なにの由よしどどとと一いつ同どうふふりりぶぶるるととふふひひぬぬ。此こ金かねのの出い所しよととままんんとと要ますす。  
 且ま下した回まわとと読よ得とくとと知しるる。

ちんぽん  
 くらり

卷之四終



